

# 作文とイマジネーション

## ―英才児の意識世界把握とその位置―

葛西 琢也

### はじめに

さかのぼること十九年前、私どもの主宰上原輝男先生は、夢の作文を取り上げて、低学年の子どもたちは分母を夢とし、分子を現実とする生活を送っていると見られると、学会で発表しました。（平成二年全国大学国語教育学会・於鳴門教育大学／後に「夢作文と個性」児童の言語生態研究No.14に掲載）低学年では、イメージの誘導に従って、現実生活をしているという意味です。その子どもたちが中学年になるとその世界認識に転換が生じているという指摘は、私たちの研究活動のつねに立ち戻るべき指針となっています。つまり、

三・四年生の子どもたちにあつては分子と分母が入れ替わるということで、具体的にはイメージと現実の分離が行われ価値転換が進行しているという主張です。これが元になって上原先生は後年、基層教育学を提唱しています。「いのちの教育を再び―基層教育学試論集―」明治図書、その巻頭論文『教育の道統―基層教育学序説』（平成五年）、これがその考えを公にした最初のことと思われる。私たちは子どもたちの成長を、夢と言いいメージと言うにせよ、その誘引性と共に考えてきました。イメージの誘導とは無意識世界からの誘引性ということですから、言い換えればそれは先験的なものとして考えていると言うことです。日常生活の様々な場面で、私たちは意識の深層からの回路と繋がっている

子どもたちの姿を認めることがあります。それ故このような子ども意識世界への接近を試みてきたのです。その時、子どもたちはその意識世界をどう捉えているのか、どのように見えているのか、子どもたちの作文からも窺い知ることが出来るように思いました。そこにはいくつかの形が認められました。これはその報告です。

用いた作文資料は私立聖徳学園小学校の2年生及び5・6年生のものです。聖徳学園小学校は知能指数140以上の子どもたちを対象にした英才教育を昭和44年に開始、以来40年になります。上原先生はその開設時のカリキュラム委員でした。英才児の特殊性、偏向性が人間の子どもたちの成長の姿、その過程を指し示しているはずだと先生は常々語っていました。



## 一、絵を見て作文を書く

子どもたちが運動会なり遠足を作文にするとき、どうするのかというと、自分の思い出を、朝からあるいはその前の日からの自分の行動を時系列に従いたどっていくことになるでしょう。それはしたこと見たこと聞いたこと、つまりことをつぎつぎと書いていくことになります。さらに、子どもたちはその時々気分や思いが捉えられていれば良く書けた作文であると評価されることを知るようにになりますから、できるだけそのような言葉をはさみながら記憶をたどっていくことになります。いわば記憶の再構成をもって作文とする常識が子どもたちにも私たちにもあります。ところが、子どもたちの書いたものをいろいろ見てみると、この作文することの常識をくつがえされるような作品に出会うことがあります。見たこと、したこと、聞いたことを書くこととする姿勢から解放された姿であると考えられます。それは子どもたちの作文する動機への働きかけの違いによるものだと思います。「絵を見て作文を書く」はその動機に働きかける方法のひとつです。

一枚の絵、そこには必ずその絵を描いた人の切り取った世界があります。絵を見るとい

うことはその切り取られた時間、空間、さらには人間を捉えることであると言えます。人はその絵の時間に刺激されるのか、空間に刺激されるのか、はたまた人間に刺激されるかして、意識世界へと飛翔することがあります。現実時間を超えて意識世界の住人となるということもできます。子どもたちはこれを絵の世界に入るといって納得していました。切り取られた世界ということであれば、写真であつても同じことであります。作文の一つの試みとして、子どもたちがどのような絵（写真）に刺激されやすいのか、そこで書かれた作文に傾向があるとしたらどのようなものか実践を重ねてきました。

（本誌15号、16号及び「英才児

—その神性と野生—」私家版）

私はここで子どもたちの作文の巧拙、上手に書けたかどうかを見る立場を取りません。子どもたちの視線が捉えているその対象と、視線の射程・深度及びその時の視線の位置を考えてみたいと思います。この小論は、「絵を見て作文を書く」から見た、意識世界を書く子どもたちの実態報告です。

初めに取り上げるのは、「サンセット」（写真1）と題され

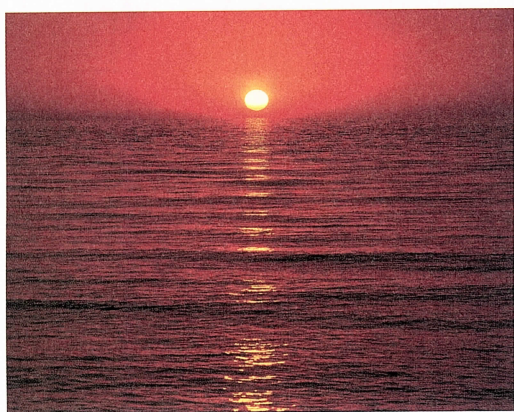
た写真を見て書かれた作文です。

北海道の夕日 2年生 男 Y・Y

はじめてだ。絵にも書けない美しさ、まさにこのことだ。これはしゃしんでとった、北海道の夕日らしい。ここは北海道の海らしい。

そこでとったしゃしんだとおもう。海につつた日がすごくきれいだ。初めて見たとき、「これはなんだ？東京かな。」と思っていた。それに比べて今はかなり知っていることが多い。

話は変わるが、知ることとは、かわるといふ事だ。かわると、大人になり、大人になると世界に第一歩をふみ出す。



67 サンセット 北海道旭川市

今回の北海道の絵は広く四角手定の写真素材が目的である。タイトルも「大漁の魚」だから北海道は最も盛っているところでもある。中でも旭川市は精神的に力強いと想を掲げてきて芸術家から作り出して増して直まることになった。夕景の海は見る限り絵の中で芸術家、やがてサンセットの瞬間が来た。こんな夕日は今まで見たことがない。水平線に雲を消すまで和らいだ美しい光を見せられた。昔人だときっと両手をあわせて拝んだのではないかなと思ったりした。

写真1 「サンセット」17.4×13.9cm  
にちりん — 光は西方へ 津田洋甫写真集



話をもとめる。

このしゃしんはどっやってとったしゃしんなのか。これはきつと本かく的に、このしゃしんをとるために、特別に動したり、かなりの時間をかけてとったしゃしんであろう。すごいなあ。

海に沈む夕日を見ての感動が素直に書かれています。空も海も真っ赤に染めて沈んでいく落日は白光爛々と輝き、その光は海に流れて足もとまでのびてきます。この空と海の変容がこの子を捉えて放しません。まもなく闇が訪れます。それまでのしばしの間、世界は赤く染まります。この境界の時間こそが子どもたちを揺さぶるのです。

写真集を用いたので、その撮影場所等の説明がそえられています。それを讀んだことによつて気づいた発見にも筆が及んでいます。

夕日への思いから突然、「知ることとは変わるということである」と考えたのは、この説明書きを讀んだことによるものと思われまふ。自分の心の内に生じた感動とそれと共にある認知、意識の違いあるいは変化に気づいた例としてまず注目したのです。意識の動き状態を対象化して捉えているのですからメタ認知の事例とすることができましょう。

次は、太平洋上を飛行する機上から雲海と日の光（写真2）を撮った写真を見てのもの

です。

雲にうかがふ光

2年 男 Y・T

雲にうかがふ光。この光は神の光。  
心の中にじわじわとはいりこむ光。

これは神がくれたあたたかみ。

ぼくは、こつうのがとりたい。

そして、ぼくのたからものにしたい。

こちらは真昼の雲海の向こうから届く白い光です。前者と同じように素直な感動をこの子も書き留めています。素直と言いましたが、神の光ということばで感動の大きさ深さを喩えているのではないでしょう。ただ、こ



写真2 太平洋上空 機上より 51.3×30.2cm

の感動が日常生活の中での感動とは異なる、強烈な出会いであったことは感じ取れます。この光は神の光とこの子が言うとき、もちろん一宗一派の特定の神をいつているわけではありません。美しいと思う感情は崇高という感情となりあわせであることがよく分かります。この感動は神聖な感情というべきで、ルドルフ・オットーのいうヌミノーゼの感情に当たるものと考えられます。神がくれたあたたかみとも言っていますが、単に美しいと感動しているのではなく、この子は自分を越えた存在と相対したときの体感をことばにしているのです。「神がくれたあたたかみ」という言葉からそう考えられます。さらに、「心の中にじわじわとはいり込む光」に注目するならば先の例と同じように、外から自分の意識を対象化して捉えている例として認めることが出来ます。

同じ写真を見たA・K君も同じような感動を受けたようです。

空には雲がある。光が雲をおしつける。

ひかりがどこかへ、

ぼくは、世界中に、

光をわたるようだ。

山や海がなくてもきれい。

なんとなくぼくは、



勇氣（力）であった。

も（その空を、心のどこかへ、  
しまっているはず。

まだまとまりのない荒削りな表現であることがかえって、感動を処理しかねているというより感動が深いことをうかがわせます。ふるえが来るほど身体は光に反応しているのではないかと思われます。感覚が鋭敏になりわきおこる情動を捉えています。そのとき勇氣とも力とも言っているのは、自分を越えた存在、自然をも越えた存在、超越と言わねばこの子は触れたからと考えて間違いないと思われまゝ。「山や海がなくてもきれいな」のひとことがそれを証しているように思えます。「もうその空を、心のどこかへ、しまっているはず。」というのもY・T君の、「ぼくのたからものにしたい」に呼応しているようにさえ思えます。

あとのふたりが素直な感動を書き留めながらも、一方で自分が見ている写真（絵）を他者によって認識された世界、意味を持った世界と意識していること、その表明がなされていることを考えなければならぬと思います。最初のY・Y君は、「このしゃしんはどいうやってとったしゃしんなのか。これはきつと本かく的に、このしゃしんをとるためだけに、特別にい動したり、かなりの時間をかけ

てとったしゃしんであろう。」と、撮影者が自分に生じたのと同じ感動を求めて行動していたことに思いが及んでいます。Y・T君も、同じような写真を自分で撮りたい、自分のものにしたいと言っているのは、単に感動に没入している、没我の状態にいてはななく、意識の働きを対象化し捉える視線を、この二人の子どもたちが獲得している事を示しているのだと考えます。では三例目のA・K君はどうかというと、「なんとなくぼくは、勇氣（力）であった。」と「もうその空を、心のどこかへ、しまっているはず。」という二行から分かることは、感動している自分への視線が明瞭に働いていると言いうことです。自分と他人とどちらにしても、意識的存在としての人間を捉えていることが分かります。

言いつ方を変えるならば、子どもたちは写真を見てきれいだと言いたいわけではないのです。例えば神という言葉でしか言いようのない事態に陥ってしまった自分を捉えることに必死なのです。写真に共鳴している自分の意識を言葉にしなくてはならなくなっているのです。

このように、子どもたちの視線の働き、意識を捉える視力の実態を私たちがこうして知ることができるのは、「絵を見て」という設定があるからだと考えられます。これは運動会や遠足の作文からはなかなか知ることの難

しいことです。子どもたちは教室で、授業という時間の枠の中で、絵という一つの仕掛け、そこには時間・空間・人間のさまざまな組み合わせがありますが、それを見るからであらうと考えられます。こととそこ、こつちとあつちと言いうこともできますが、絵や写真は現実世界と意識世界とその世界の違いを子どもたちに突きつけることになっているのだと考えられます。たしかに現実の海辺で沈んでいく夕日を見た子どもは、その感動を文章にしても、その場合その視線に対象化の働きが現れるのは二年生ではなく、もう少し後の学年のことだと思われまゝ。

（写真3）は「風雨の兆し」と題された中国のアマチュア写真家の作品です。

雲と大地 一年生 男 N・H

湖にひそむ、一本の道。

そこに、馬の大群が、ドドツと走る。

中には子馬もいる。

夜の闇の暗い空間へ走る。

馬の背中には、朝がある。

だが、馬は見向きもしない。

夜の空へ走る。

十五匹の馬は、先頭の馬に続いて、

白い馬や茶色の馬が、

茶色の馬を前にして、

白い馬があとになっている。



馬は、はてしなく、永遠の旅のため、  
さった。

先に示した三例と同じく、同じ授業の中で  
書かれたものです。

このN・H君は美しいとも、感動したとも  
書いていません。写真を見ていかに自分が揺  
すぶられたかと言うようなことは少しも書こ



写真3 「風雨の兆し」胡镇彬（中国） 27.5×10.8cm

うとしていません。この子の作文がこれまで  
見てきたものとどこが違うのかというと、ひ  
とつの世界を書いたということだと言えまし  
よう。ひとつの意識世界が定まったと言うべ  
きですが、この子はお話を書こうと思つて書  
いたわけではありません。お話を作つてみよ  
うという動機で書き始めたものではないとい  
うことです。この子がお話の世界に連れ去ら  
れたといった方が正しいのでしょうか。絵を見  
て作文を書くのですが、見る意識、絵を説明  
する意識がとても希薄だったと言うことでも  
あります。どこを見ているのかといえれば自分  
の意識に顕れた世界を見ているのです。意識  
の中に立ち上つてきた世界を書き留めたらこ  
のようなお話になったということでしょう。  
ほんの一瞬のことですが、一つの場面が見え  
た、これを私たちはイマジネーションとよん  
でいます。繰り返しますが、お話を作る意識  
があつて書いたものではありません。イメー  
ジ世界が見えたのです。

この子が見た馬たちは疾走しています。疾  
走しているというような言葉はどこにもあり  
ませんが、この文章を読んだ人は誰でも、そ  
こに疾走している馬を認めるはずで、しか  
し、よく見れば写真の馬たちは走っていませ  
ん。馬たちの足は駆け抜けるギャロップの形  
ではありません。もし、この子に写真をよく見  
て説明する意識があるだけだったら、このよ

うなお話を書かなかつたはずですが、絵  
を見て作文を書くというねらいから言えば、  
これでいいのです。子どもたちを無意識世界  
（イメージの世界）に連れ去るに違いないと  
思える絵や写真を用意しているのですから。

何を書こうと言うことが一切な  
く書く、無意識世界に突き動かされて書いて  
いるのです。私たちはこれを触発されるとい  
っています。言ってみれば子どもたちには、  
扉を開かれた無意識世界からの回路が繋がっ  
たのです。このような場合、子どもの作文、  
子どもが書く文章という常識をくつがえされ  
た思いを私たちはいなくことになります。

## 二、見えないものを 見ている子どもたち

はじめに見た三名の子どもたちは、写真  
（絵）に感動している自分、写真の世界に共  
鳴している自分をとらえようとしていまし  
た。それでは、「馬は、はてしなく、永遠の  
旅のためさった。」と書いたN・H君はどう  
かという、走り去る馬たちを眼前にしてい  
ることになります。N・H君においては意識  
世界の転換が生じているのです。これがこの  
子の立ち位置ですが、このとき眼前に広がっ  
ている世界はどのようなものであるのか、考



えてみたいと思います。

一瞬の光景といつてよいでしょう。子馬を中にして、馬の大群が走っていくのです。

湖にひそむ、一本の道。

馬の大群がドドツと走る。

夜の闇の暗い空間へ走る。

馬の背中には、朝がある。

だが、馬は見向きもしない。

夜の空へ走る。

馬は、はてしなく、永遠の旅のため、

さつた。

馬たちの数だとか毛色だとかを描写したところをはぶいてみるとこうなります。N・H君が捉えた世界とはこれに尽きます。写真を見て、そのうえでこの文章を読んだ私たちが少しも違和感を感じないのは、これがイメージ世界のことだという了解をしているからです。はじめの一行、「湖にひそむ、一本の道。」このひとことによって私たちはイメージ世界、意識世界に連れ去られています。写真には見えない道、写っていないが見えているのです。湖水の上を馬の群れが疾駆していくのです。見えたのは鏡のような湖面だったのでしょうか、それとも吹き荒れる風に激しく波立っていたのでしょうか。そこではそんなことがあるはずはないとか、事実はどうな

のだとかといったことはまったく問題になりません。そこには意識世界の誘引性のもとに一定の方向性を持ったイメージの運動が認められます。ひとつの秩序が支配しているといえます。ですから私たちは現実世界とは異なるもうひとつの世界として認めるのです。

宮崎駿監督の最新作「崖の上のポニョ」でポニョが宗助のもとに行こうとして、逆巻く大波の上を走るシーンを思い出します。打ち寄せる波のうねりは気がつけば目玉を持った生き物のようになっていきます。その波の上のつてポニョは猛スピードで走ります。つぎからつぎへと激しく打ち寄せる大きな波。目玉を持った波頭は崩れそうに崩れずに走る。

そのダイナミズムとスピードは、宗助のもとへ一刻でも早くたどり着きたいというポニョの思いとひとつであって、ここにひとつの方向性を持った運動、一定の秩序が成立していることを認めることができます。五歳の子どもたちを念頭に置いた作品だそうですが、このアニメズムの世界、あるいはディフォルメされた世界を認め受け入れているのは五歳の子どもだけではありません。

馬たちは自分たちの背後に広がる朝ではなく、夜の暗闇に向かって走ります。恐る恐るでもなければ、ためらっているのでもありません、馬は見向きもしないのですから。写真の馬たちが画面の左側の方向、黒雲が立ち

こめる彼方を向いているということもあるでしょうが、この子にも、さらに言えば私たちにも馬の闇の中を疾駆するイメージが元々あるのだと考えられます。馬と闇はイメージの世界では結びつきやすいのだということです。結びついてそこに運動を起こすのです。つまり秩序とはイメージの働き、イメージの運動がもたらす秩序だと言うことです。この写真の馬たちが触発したN・H君の意識空間に於いては、朝の世界と闇の世界の狭間に、何の矛盾もなく馬の行動に焦点を結ばせることになったのです。（本荘雅一「心意伝承——遊働世界に生きる——」國文學二〇〇八年四月号 學燈社）

一方、明るい朝の空間から闇の空間に向かって走り抜ける馬たちに焦点の合わない場合があります。その一例を見てみましょう。

田んぼを走りぬける馬 2年 男 K・Y

まっ黒な雲に向かって走る馬、何をしに行くのか、むれを作って、不思議だ。そんなことはあとあと、でも馬が行く所は、やっぱり気になる。だから、行く所を考えよう。写真の左側（馬が向かう方面）を見てみよう。しばらく黒い雲が続いている。でも、もっと先へ行くと明るい土地が見える。たぶん馬たちは、そこを目ざしているんだ。

写真にはうつっていないけれど、その明る



い土地のもつと先を考えよう。たぶん明るい森があつて、そこに馬たちは住みつこうと思つてゐるんだ。でも、馬たちはどこから来てるんだ。たぶん、前の住む所は暗い森だったから、さびしかったんだ。それだったら、ぼくも明るい所がいいな。でも、前に住んでいた所も明るかったら、散歩がてらで来ているのだろう。でも、どっちなんだろう。でも、こんなに大きいむれを作つて行つていたら、散歩ではないと思うな。ぼくが思う答えは、「前、住んでいた所はまっ暗で、行く手は、明るい所（住みやすい所）に向かう」ということだと思つた。

馬たちの不思議な行動。K・Y君は不可解な行動にひとまず答えを出しましたが、納得はしてゐないのでしょうか。考えても考えても迷路の闇に迷い込んだようで堂々巡りが続きます。この場合K・Y君は意識世界にはいません。現実世界にいて写真を見ています。立っている位置、見てゐる世界がまったく異なることがよく分かります。いわゆる作意で解ける世界ではないのですから、どう考えても辻褄は合いません。でもこれだけしっかりと考えを跡づけて書き留める力がありますから、貴重な資料なつてゐるのです。

この子どもたちが馬たちの行動の理由を求めて考えても、現実生活に於ける現在にたい

まの自分たちの知恵以上の答えを見つけることはできません。二年生の子どもたちに闇の世界に向かつて進んでいく、闇を求める理由は自分の行動世界にはないはずで。できることなら馬首をめぐらせ、いま来た道を引き返したいと考える子どもたちも多いと考えられます。ではなぜN・H君は「馬は、はてしなく、永遠の旅のため、さつた。」と現実生活の次元から解放されたところに焦点を合わせることでできたのでしょうか。それは自分自身のひらめきに乗つたといえればよいでしょうか、直感に身をまかせたのです。雲と水と、明と闇と、天と地と、そしてその間に配置された馬とが触発するイメージ世界に身を置くことができたからです。はじめに、子どもたちが絵の世界にはいるといつて納得していただけたのはこのことです。指摘されてみれば、このような意識世界の転換は子どもたちにはだれでも身に覚えのあることだったので。これが子どもたちの意識生活の基層なのです。ただ、それは作文にすることではないと思つてゐる子どもたちも多いのです。

さらに考えたいのはこの直感ということ。この写真には「風雨の兆し」というタイトルがついていますが、これを撮つたカメラマンはまさに一天にわかにかき曇りといったもよいような天候の急変に焦点を合わせていると考えられます。もちろん馬の群れが視野

に入つてはいるのですが、今だ、と思つてシャッターを切つた瞬間を「風雨の兆し」と題したことから考える限り、捉えているのは目に見える天候の急変であつたといえましよう。あるいは天と地の間に馬を捉えたからこそ、今だと思つたのだとも考えられますが、そうだとするのならその今を的確な言葉として意識化できなかったということなのでしょう。一方、N・H君はその写真を見て直感に身をまかせたと考えましたが、この直感を予兆、予感と言ひ換えた方がこの時のこの子の実態により近づくことになるように思ひます。つまり、予兆・予感の瞬間として写真を見たということになります。

残る問題は馬です。馬とは何かということを考えなくてはなりません。馬はイメージの世界では走る存在と考えられています。単に走るのではなく飛ぶ存在と言ふべきでしょうか。馬が走ると言つては当たり前のことのようにですが、馬は私たちの意識を転換しハッとさせてくれるのです。ですから、そのイメージがはらむエネルギーは、馬たちが走る方向を触発するだけにとどまらずに空間を求め天空へ上つていくことになります。まさに天翔る天馬の図と言えましよう。それは同時に未来という時空でありますが、その馬の走り抜ける印象、通過感覚はそれではおさまらず、さらに永遠という無限さをも求めることにな



るのだと考えられます。つまり、馬というイメージがはらむエネルギーは、ひとつの方向への志向を空間に転換し、空間を無限の虚空に膨張させ拡散してしまうのです。これはもう爆発と言うべきでしょう。（上原輝男「曾我の雨・牛若の衣裳―心意伝承の残像―」二二頁）

### 三、意識世界に遊ぶといふこと

大向こうをうならせるかっこいいお話をまとめたからとN・H君を持ち上げてきたわけではないのです。子どもはだれでもこのような意識世界を知っているのだと思います。それまではしゃいでいた子が急におとなしくなって虚空に視線を向けて放心状態にあるとき、その子は無意識世界で遊んでいるのだと思います。すぐ我に返ってさっきの続きを始めるようすを見ると、それはほんのわずかな時間のことだと言えましょう。しかし、現実世界からは遙かに隔たった時空にいたのです。そこを仮想の世界と言うこともあれば、神話の時間ということもあり、たんにあつちということもあるのです。そのあつちで遊んできたひとつの例があります。（写真4）を見て書かれた作品です。

まん月と花

2年女 A・M

まん月だ。月にはんしゃされた太よの光にてらされた花は、とてもきれいだった。

花をひとつとつてみた。きれいな花びらが一まい、下におちた。それにしても、これは何の花なのだろう。

おもわず前にでてみた。

あつ、あぶない。海におちるところだった。

私は、そのなにかのえだにつかまってたすかった。

ぐうぜん、そこに夜のさん歩をたのしんでいるらしい人が通りかかりました。その人に、あれがなんの花かきいてみた。あれは、さくらだそうだ。あんなふうになれているさくらは見たことがなかったので、私はびっくりしました。

今、気がついたのですが、月のもようが島や大りくをばらばらにした地きゆうみだ。

あ！そういえば、今、何時！わあー、もう夜二時だ！もうかえらなくちゃ…… あ、今日はとくべつに夜あそびしていいんだった。ふうー、あわててそんしちゃった。

おなかすいたなあ。おべん当もつてきてよかったあ。

じゃあ、食べたなら次の話ね。

ふう、おなかいっぱい。帰るか。

あ、いけないいけない、話をするんだったよね。

そういえば、海にいっぱいさくらの花びらがおちている。

「春一番」でちっちゃったのか。

月のもようが地きゆうのひょうめんのけしきにみえてきた。

もう夜があけてしまった。

私は、もう帰ります。

では。

子ども時代を振り返ってみれば、誰にでも思い当たることがあるはずで。故郷の家でのこと、庭先にいながら、向こうに見える山

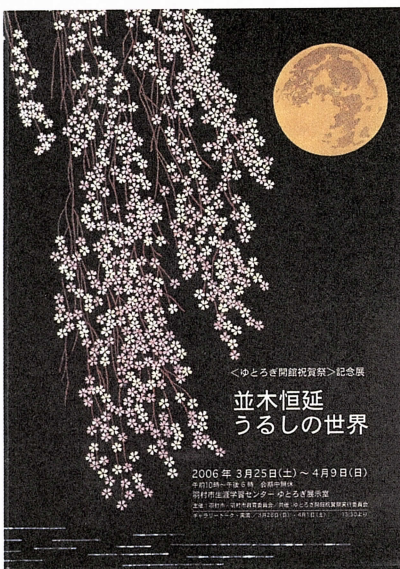


写真4 「月昇」21×29.6cm  
並木恒延個展パンフレットより



の尾根道を歩いている自分に気づいて我に返ったこと。熱を出して寝込むたびに、部屋に掛かっている絵の中の橋をいつも渡っていた記憶。同じように教室にいながら、A・Mさんは、絵の世界でぶらぶらと真夜中の散歩を楽しんでいます。仮想の逍遙と言わねば、授業の中で意識的に取り上げる価値のあることだとおもうのです。

## 月夜のさくら

2年 男 N・T

月が空に出ています。まん月です。

さくらがきれいです。さくらの下にある池が、月の光で光っています。

ぼくは池でおよいでいました。

ぼくは池につかんで月を見た。

月がきれいだなあと思った。

仮想の逍遙であればこそで、現実には子どもが夜の池で泳ぐなどとまずあり得ないことです。これまで意識を遊ばせていたことがあったと気がつく、操作してみようと子どもたちはいろいろ試みを始めます。次は(写真5)を見て書いた作品です。

## 光

2年 男 M・R

雲の上に光が見える。朝日だ。その下の雲はまるで雪のような雲だ。

太陽が上ってきた。



写真5 朝日岳より大雪山系 朝日を望む 51.3×30.2cm

もう太陽が空高く上っている。だんだん空が明るくなってきた。「今、何時かなあ?」と思って空を見上げる。「7時ぐらいだ。」光のぼしで分かった。

朝日はきれいだ。

山の上でぼくは見ている。夜のうちに山を歩いたから昆虫さいしゅうのカブト虫は見つけたが、まだぬい。

これらの作文を単につくり話だと思っただけならいいでしょう。それでは無意識世界からの誘引とともにある子どもたちの成長の過程を見届けることができませぬ。頭でこねくり上げて出来上がった話か、それとも無意識

世界からの回路を通じてたちのぼった世界を語ったものかは見分けなければなりません。前節で見たN・H君の「雲と大地」はその典型例と言えます。教室でのことです。写真を見ていたら一瞬、眼前を走り抜けていく馬たちが見えた。永遠の彼方に向かって走り去ったという、このような意識世界への転換をイメージネーションと呼んでいることは先に述べました。これは意図せず生じたことです。このてんで睡眠中にみる夢と同じことと言えますから、白昼夢といえは言えないこともあります。しかしながら、これが生身の子どもの生きている姿だとしたら、そんなもの現実世界を生きる身には必要のない邪魔なものとして無視したり否定してしまではなく、私たちはこのような幻視の世界と共に生きているのだという人間理解に至らざるを得ません。幻視という言葉は誤解を招くおそれがあるようですが、無意識世界からの回路が通じたとき、子どもたちの言葉がよみがえり、命を得ることは取り上げた作品から感じていただいていることと思います。子どもたちの言葉は意識の基層ともいふべき無意識世界に胚胎するものだといえましよう。

掲載作品も含めて、子どもたちの意識世界から立ち上ってくる世界を読んでいて分かることは、子どもたちは日常の現実世界にだけ生きているのではないということです。時計



の針が刻んでいく現実世界から、永遠の時間が支配する世界へイマジネーションの翼によって飛翔していきます。それはほんの一瞬のことですが、永遠の時間、神話の時間に触れて戻ってくるこの意味を考えなければならぬと思います。例えば、現実世界だけが私たち人間の生きる世界であるのなら、闇の深さを測る視力を私たちは獲得しなかったのだと思います。闇の深奥を照射するほどの射程を持った視線があればこそ「永遠の旅」を思うことも可能になります。父母未生以前を問うこともするのでしょう。永遠という時間を思いつつ現実世界を渡っていくのは大人も子どもも変わりはないのです。雲海の彼方に輝く日の光に神を見てしまうのが私たちです。人智を超えた存在を感じてしまうからそれにひかれてご来光を拝みに行くのでしょうか。現実対応以上の知恵とエネルギーが可能になつて行くのだと思います。

一枚の絵、ひとつの言葉に触発されて立ち上ってくる意識世界、噴出するイメージ世界は、それはその絵の世界とはちがいます。その絵を見た人の意識のなかに捉えた世界です。ですから、絵の世界そのままではありません。並足で歩いている馬が、疾駆しているのはその良い例です。飛行機の上から見るはずなのに、山の頂上からの眺めにかわることもあります。この事実が気づくと、そこ

に操作の意識が生まれます。子どもたちが言っていた絵の世界に自分が入るというのがそれです。満月の真夜中のお花見、桜の花びらの浮かぶ夜の池、その水の中から月を見たのも、夜が明けるまで山道を歩き続けたのも意識操作の結果です。絵の世界の時間、空間、人間の内のどれかを操作してみると、つまり変更を加えたり置き換えたりするとたちまち世界の転換が起こります。この操作を「事実と反対のことを仮定し想像する」（本誌16号）ということもできます。言うまでもありませんが、事実とは絵の中に設定された事実。写真に切り取られた事実と言うことです。これは、おもしろおかしくお話を作るテクニクを子どもたちに教えようというのはありません。

現代の子どもたちがしているのと同じことを、昔から私たちの先祖は続けていました。臥遊といって水墨画を見ながら描かれた世界で遊ぶのです。お酒を飲みながら歌を詠んだりしたのでしょう。臥遊の心が現代にまで伸びてきているのです。

子どもたちは、意識の操作ということに気づかなくてはなりません。資料として用いていた作文はどれも二年生が終わろうとしていた頃を書いたものですが、すでに中学年の子どもたちの考え方の特徴が始めれていると思います。無意識を分母とし現実を分子とする

認識に転換が生じています。意識世界の対象化、意識世界で遊ぶ子どもたちだと言えましよう。お話の世界、神話の世界こそ、抽象的に考えられるようになるまでのこの時期の子どもたちの思考の世界と言えます。成長途上にある子どもたちが直面する問題、乗り越えていかなければならない障害を考えると、三年生四年生の子どもたちは具体的に考えるのですが、物語の世界すなわち仮想の世界です。自由が保障されています。このときに意識の操作ということに気づいていると考えの幅が広がります。無意識の誘導にしたがいつつも、「事実と反対のことを仮定し想像する」ことができれば幅のある別の視点からの思考が可能になります。このように考えると、作文が手段になっていることに気づきます。子どもたちの成長を見届けるための手段でありますし、子どもたちの意識を刺激し新しい発見へと導き支えるための手段です。

#### 四、風景をみる位置・世界をみる位置

自然からのプレゼント 2年 男 ー

海から夕日をながめた。

きれいだった。太陽の光が、水面にうつっていた。



時間をもどすと、ぼくは、朝日からながめていた。

ここは北海道。ぼくは、さいしよは東京にすんでいた。でも、父のしごこのかんけいで、北海道にひっこした。さいしよはいやだったけれど、いつしかたのしくなってきた。

ぼくは、太陽がしずむまで、太陽を海からながめる。ずっと、ずっと、ずっと。

さきの(写真1)を見てのものです。1・

1君に引越しの経験はありません。はじめから意図して時間・空間・人間を操作したものだと思われます。ただその段階ではどう落ち着くか不明なのですが。結果的にこう設定することで明瞭になったことがあったのだと思われます。それはやはり夕日の存在です。「ぼくは、太陽がしずむまで、太陽を海からながめる。ずっと、ずっと、ずっと。」といっていることです。転換された時空、北海道の海岸で落日を眺める、それもずっとを三度も繰り返し返すとき、既に時計の時間を越えています。夕日にも無意識世界の扉を開き回路を繋ぐ働きがあるのです。落日のもたらす超越感覚と対応する問題、それは現実的な人間関係の問題なのか、生きている限り必ず出会う根本的な問題なのかは分かりませんが、そのような問題の記憶、余韻と共にあると考えられることです。言い換えれば、この子にとって

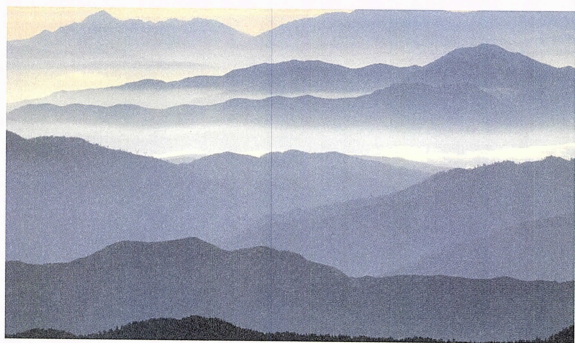


写真6 長野 乗鞍岳から 51.3×30.2cm

夕日はきれいな景色であることにとどまらず、生命をつつみこみ導く存在になっていると考えられるのです。つまり、夕日は生きることにおける索引の位置を占め始めはじめたのです。夕日と対峙すること向き合うことが未来を望み、誘導として働く経験が1・1君に形成されているということです。

はからずも子どもたちが対峙した絵や写真は落日と海、雲海と旭光、月と落花、天地と馬という無限の内に有限をはらむものでした。これら矛盾した関係にあるものをひとつの世界にまとめ上げるには、子どもたちの無意識世界への回路が開かねばなりません。(上原輝男「曾我の雨・牛若の衣裳」心意伝

承の残像」一六一頁)その実例をいくつか見てきたのでした。

写真6は、写真2と5と三枚同時に黒板上に掲示して用いたものです。やはりと言うべきか、6を取り上げた事例はごく少数だったことを付け加えておきます。

ここで、絵を使わなかった例を示しておきたいと思います。「あの橋を渡って」という言葉を提示したものです。

あの橋を渡って 二年生 男 O・H

あの橋を渡って川で魚をつろう。

あの橋を渡って電車に乗ろう。

ふるぼけたかいさつ、ゴキブリが出るトイレ。みんな、古いけど、またそれはそれでおもしろい。あさひがのぼる。もう行かなきゃ。あの橋をわたったら、ちがう世界ちがう星がまっている。むこうにわたったら、Yの字の川が広がっている。「キーキー」いさましい音を立てながら電車は、一おくメートルの橋をわたって行く。なかなか駅につかない。もう夕日がさしてアゲハがとんで、カブトが木についている。ふうけいが広がる。まどから見た長いかげ。水にうつってながれてく。

よるは電車でねむって、朝おきてもまだ駅にはつかなくて。でも、ねむれない。こっそりサクランボを食べて、だれにも気づかれな



いようにはしごをおり、下のベッドの下であそんでいた。それからロビーへ行ってみた。

ディーゼルが引くこのカモノハシ号。そろそろ夜の十二時だ。トンネルに入ってもねむれなくて、しゅつてんについたらホームにツクシがはえてた。さあ、電車からおりてしゃしんをとりにいこう。そして、ディーゼルに手をふった。もちろんきやくしゃにもね。

そして、その子は引っこしをしづらい。長い橋を渡つてね。前と同じなのはかみの毛が風になびいていた。そして、その子は新しい家にいったんだぞうだ。

橋というイマジネーション触発装置によってこの子は夢の世界で遊んでいます。「橋を渡ったら、ちがう世界、ちがう星がまわっている。」と言っています。橋を渡ると時空の転換が起こることをよく知っていると云うべきでしょう。その転換の意識を絶対値として示すと「一おくメートル」になるのでしょうか。

もう一点注目したいのは、長い夢の旅が終わったところでO・H君の話は終わらずに、さらに「そして、その子は引っこしをしづらい。」と話を転換していることです。ここには長い夢の話の対象化がみられます。ここでも意識の対象化、メタ認知が認められます。語り手を登場させたのだというお話作りのテクニクとしてではなく、引っこしに伴

う不安と予感処理する立ち位置をこの子は見つけたと言わべきでしょう。

さて、子どもたちが意識世界を書くその事例を見てきて、残っている問題はこの意識世界を見る位置だと考えています。子どもたちは絵の世界に入ると言い方で納得していましたが、正しくは絵の世界ではありません。例えば、橋ということばによっても見えてくるのですから。絵であつてもことばであつても見えてきたのは自分の意識世界であるとしてきましたが、それを大きく分けて風景と世界のふたつに分けて考えることが出来ると思います。子どもたちの書いたものがそのように語っています。はじめに見た三例、あの子たちが眼前にしていたのは風景であるといえましょう。スチール写真を見ている状態と喩えることができましょう。この風景を見る立ち位置とイマジネーション即ち世界を見ている立ち位置は異なります。視線の位置が移動しているのです。この位置の移動変化を意識活動の発達成長の問題として考えなければならぬのだと、これも子どもたちの作文から分かってきたことです。

すでに以前べつのとところで報告したのですが、この位置の移動変化を明瞭に示している事例です。(写真7)を見ての作文です。この絵の特徴は鳥

瞰の視点で描かれているということです。俯瞰景にはイマジネーション触発の強烈な磁場が備わっているのだと考えています。(本誌15号「トランスフォーメーションの獲得」)

なつかしき街 六年 男 H・S

僕はヨーロッパのある街に住んでいる十歳の少年です。僕の家近くに大きな時計台があります。その時計台に上がると、広い広い海が見えるんです。人々も明るいし、見渡すかぎり海。僕はこの海が大好きです。

――二年後――

僕はこの街と今日限りでお別れです。僕のお父さんの仕事の関係で、日本という国に行かなければなりません。さようなら、僕の大好きな街……

――二年後――

もう日本にも住み慣れて、僕も中学三年生



## 石本正素 素描展

10月10日(木)～15日(火) 大丸ミュージアム・東京(12階)  
入館無料



写真7 石本正素 素描画展ポスター  
18.2×25.6cm



になりました。

ある日、学校から帰る途中で、東京にある大丸というデパートの前にポスターが出ているのに気がつきました。それには何と僕の住んでいたあの街が出ていました。僕はビックリしました。「入場無料」と書いてありました。入ろう、僕はそう思つて、大丸の中に入っていました。

僕の街の絵がありました。僕はひどく感動しました。うれしかったのです。僕はその大丸の前にあったのと同じポスターを買いました。

それを今でも持っています。十年すぎた今でも大切に持っています。

また今度、あの街へ行つてみたいなあと思います。僕の大好きなあの街へ。

この場合、このポスターがかつてはヨーロッパに住んでいた、来日して十年になる青年の存在を裏付けます。言い換えればこのポスターがこの青年のすんでいる世界を定めたのです。イマジネーションとはいかに無限定に突発的に時間空間の転換を行うものであるか、その一端を見ることが出来るように思えます。その時間がどのように設定されたかと言えば、十年というスパンで切り取られていますので、なつかしいという懐旧の情も伴うことになります。空間的にはヨーロッパと日

本さらには東京のデパートとまるでドラマのプロットを思わせませう。この作文が書かれたということは、ひとつのイマジネーションの確認がなされたということであるわけですが、ではそのときの立ち位置はどこかといえば空飛ぶ鳥の目であるということになります。俯瞰景としての絵や写真だけが鳥瞰の視点を伴うイマジネーションを触発するわけではないのですが、この場合とても象徴的な例だといえます。つまり、過去に未来に現在へと時間のあるいは空間を自由に行き来する視点こそ鳥瞰の視点といえます。

イマジネーションによつてもたらされた世界を捉える立ち位置は常にその世界の中にあると言ふことが言えると思います。この点で、風景を見る位置と大きく異なると言えます。この意識世界の違い、風景にせよ世界にせよそれを見ている位置、ここに自己意識の発生が考えられるのですが、つまり、このイマジネーションの頻度の違いは子どもたちの成長に大きく関わっていると考えられます。

## 五、譬喩の世界

意識世界と日常生活意識との隙間に気づいた子どもたちは意識世界への操作を始めるこ

とは見てきたとおりです。この意識の操作は、意識の対象化と共に成立しています。対象化の違いが、風景として捉える段階、世界として捉える段階、その意識世界で遊ぶ（語る）段階をそれぞれもたらします。そして、この意識の対象化は、次にことばの世界の対象化へと向かい、譬喩の世界へと子どもたちを導くことになるのだと考えられます

譬喩を自分のものにし始めた事例にまず注目したいと思います。

海に届く一本の電灯 2年 男 K・S

この、写真の光は魚たちにとつて一本の電灯、そしてたつた一筋の光なのだ。そして、この一個の太陽、いや電球です。ビッグバンから始まり宇宙の小惑星や地球、銀河系、太陽系、暗黒星雲、「月、水星、火星、金星、木星、土星、海王星、冥王星、地球」太陽、以上の中で、「」にかこつた惑星は小さな隕石同士がぶつかつて出来たもの。

地球は変化していったが、月は変化してない。

月は調べられている

地球の軌道には隕石が乗っている。

ビッグバンは恐竜も、巨大トンボ、原始人、シダ、原生林、化石、銀河系、星雲、動物、海、川など、いろんなものを作りだした。ビッグバンはすべての親だ。



そして、作り出された地球に魚が生息し、太陽は、その魚の一本の光になる。そう、たった一本の電灯に。

言うまでもなく（写真1サンセット）を見て書かれたものです。K・S君の思いはビッグバンに始まる宇宙の生成、惑星地球の誕生にまで時間をさかのぼり、その空間は銀河系をも超えようとしています。それはイメージネーションがもたらした時空と言うよりは、K・S君のすでに獲得している知識の眼によって見ることできた世界と言えましょう。これはレントゲン写真の陰影から患部を見つけ出す、医師の理論に裏打ちされた眼に喩えて良いのだと思います。しかし、知識の眼と言っても、分かれば分かるほどこの地球上に命のあることの不思議、その思いは深まっていくのだと思います。「一筋の光なのだ」「一個の太陽」さらに「一本の電灯」と続くことばから、この落日の深紅の輝きを、K・S君がどのような思いで捉えているのかを想像することが出来ます。その深い思いを表明する手段として、別の言葉で言い換えること、即ち譬喩をK・S君は求め始めているのだと考えられます。「ビッグバンはすべての親だ」という言い方からもそれを感じ取ることが出来ます。

最後に、譬喩の操作が自在になったと考え

られる事例を示して本稿を閉じることとします。

#### 山頂の鷹

五年 女 T・K

雲ひとつ無い、澄みわたった空の下で、一羽のオスの鷹が飛んでいた。下を見ると、青々とした山々が、いくつも連なっている。鷹は、子どもにやるための獲物を探しながら飛んでいるのだ。空をゆうゆうと飛んでいると、目的を忘れそうだった。

鷹は、鋭い目をじつと凝らして獲物を探す。すると、かすかに白いものが見えた。少し下がって見ると、ウサギだということが分かった。良い獲物である。しめた、鷹は急降下した。

ウサギは草をのんびり食べていた。大きくて太っているの、足も遅そうだった。ギリギリまで近づいたら、ウサギも気づいて逃げ始めた。やはり足が遅い。これなら楽に捕まえられそうだった。鷹は地面すれすれを高速で飛び、ウサギに近づいていく。

もうあと少しというところで、鷹はガット爪を開き、ウサギに襲いかかった。

ウサギはあつけないく、鷹の爪に引っかかった。持って帰るとしたら、重たい。ウサギが落ちないよう、爪をしっかり引っかけ直して飛んだ。

巣は山奥にある。山の頂上に、ひときわ

ヒヨロツと高い杉が生えている。あの木に巣があるのだ。鷹は巣にたどり着き、三羽の子どもにウサギを渡した。子どもたちは我先にとばかりウサギにとびついた。親は忙しい。休む暇などなしに、子どもと自分の分の獲物を捕らなくてはならない。そこに、はやおやが獲物のネズミをくわえて帰ってきた。バトンタッチ、鷹は獲物を探しに飛んでいった。日が暮れてきた。鷹は夜はあまり目が利かない。最後のネズミを捕まえたところで、切り上げることにした。巣に戻り、獲物を与えようとしたら、子どもたちはもう、すでにウトウトしていた。お腹がいっぱいで、満足なのだろう。それを見て安心し、鷹は自分でのネズミを食べた。

今日も大忙しの日だった。明日も忙しい日が待っているだろう。二羽は、疲れを癒すために、子どもたちによりそい、深い眠りについた。

先の「海に輝く一本の電灯」との違いは、同じ譬喩と言ってもこの五年生のT・Kさんはひとつの世界を捉えて譬喩としているところにあります。鷹の親子の世界を物語る位置を獲得したことによって、自分の置かれた境遇を見渡す位置を確認していると言えます。

（東京・元聖徳学園小学校教諭）